

## 第一期ライチョウ保護増殖事業実施計画（7頁）

【表2：中・長期を含めた今後の取組目標（項目の整理）】

①5年 （短期）	全体	□中・長期目標の具体的内容や指標の設定（環境収容力の推定方法の検討を含む）
	生息域内	□各山岳集団の生息状況の詳細な現状把握 □減少の影響要因を解明するための取組 □効果的な保全策の検討と、優先度及び緊急性の高い事業実施  （要検討：野生下における餌の現存量と摂食量の推定、野生復帰の必要性及び実施可能性に関する検討を、生息域外と連携して行う）
	生息域外	□別亜種スバルバルライチョウの飼育技術を応用したライチョウの飼育下繁殖の開始と飼育技術・体制確立 □一定程度の生息域外保全個体群の確立と科学的知見の集積 □スバルバルライチョウによる継続的な知見・技術蓄積（ウイルス・細菌対策を含む）  （要検討：野生復帰させ得る資質を有する個体を想定した飼育・繁殖技術のあり方、人工餌と自然の餌に関する検討を、生息域内と連携して行う）
②概ね10年 （中期）	生息域内	□各山岳集団の保全対策案の確立と保全対策の実施 □生息域外個体群を活用した野生復帰の技術開発
	生息域外	□生息域外個体群（主として保険個体群）の確立・維持 □野生復帰技術と連携した飼育・繁殖技術の開発
	共通	（要検討：野生個体群の状況と上記①（短期）の検討進捗に応じて、適切な手法による野生復帰の技術及び体制、試験実施等の検討）
③概ね20年 （長期）	生息域内	□各山岳集団が自然状態で安定的に存続できる状態とする □生息及び繁殖に適した生息環境の改善 □生息域外個体群を活用した野生復帰の技術確立・維持
	生息域外	□生息域外個体群（主として保険個体群）の安定的な維持 □野生復帰技術と連携した飼育・繁殖技術の確立・維持
	共通	（要検討：野生個体群の状況と上記①（短期）及び②（中期）の検討進捗に応じて、適切な手法による野生復帰の検討）

※目標の内容は、常に取組の進捗状況を踏まえ、必要に応じて修正・見直しを行う。  
特に、5年ごとの本実施計画の見直しの節目においては評価を行い反映する。

## 第二期ライチョウ保護増殖事業実施計画（目標素案）

【表2：中・長期を含めた今後の取組目標（項目の整理）】

①5年 （短期）	全体	□中・長期目標の具体的内容や指標の設定（環境収容力の推定方法の検討を含む）
	生息域内	□各山岳集団の生息状況の詳細な現状把握 □優先度及び緊急性の高い地域における捕食者対策事業やケージ保護事業の実施 □生息及び繁殖に適した生息環境の改善事業の実施（火打山におけるイネ科等植物除去事業を含む） □絶滅地域における個体群回復試験の検討及び実施（絶滅地域における個体群復活に関する判断基準の整理が必要）
	生息域外	□野生復帰させ得る資質を有する保険個体群の創出技術の検討及び確立（対象個体群の検討が必要） ・技術開発項目：人工飼料の開発／腸内細菌叢獲得技術／アイメリア原虫の病理解析 等 □中標高域での高山植物栽培技術の開発と栽培植物給餌試験の実施
	共通	□野生復帰技術開発のための試験の実施（中央アルプスにおける卵及び個体・家族等による移殖試験を含む）
②概ね10年 （中期）	生息域内	□各山岳における生息環境変化の正確な把握 □各山岳集団の保全対策案の確立と保全対策の実施 □生息域外個体群を活用した野生復帰の技術確立
	生息域外	□生息域外個体群（主として保険個体群）の確立・維持 □野生復帰技術と連携した飼育・繁殖技術の確立
	共通	□野生個体群の状況と上記①（短期）の検討進捗及び必要性に応じて、絶滅地域等において、適切な手法や体制による野生復帰及び移殖に関する試験の実施
③概ね20年 （長期）	生息域内	□各山岳集団が自然状態で安定的に存続できる状態とする □絶滅地域における個体群の回復と安定的な維持 □生息及び繁殖に適した生息環境の維持・改善 □生息域外個体群を活用した野生復帰の技術確立・維持
	生息域外	□生息域外個体群（主として保険個体群）の安定的な維持 □野生復帰技術と連携した飼育・繁殖技術の確立・維持
	共通	□野生個体群の状況と②（中期）の検討進捗に応じて、必要に応じて、野生復帰の検討及び実施

※目標の内容は、常に取組の進捗状況を踏まえ、必要に応じて修正・見直しを行う。  
特に、5年ごとの本実施計画の見直しの節目においては評価を行い反映する。